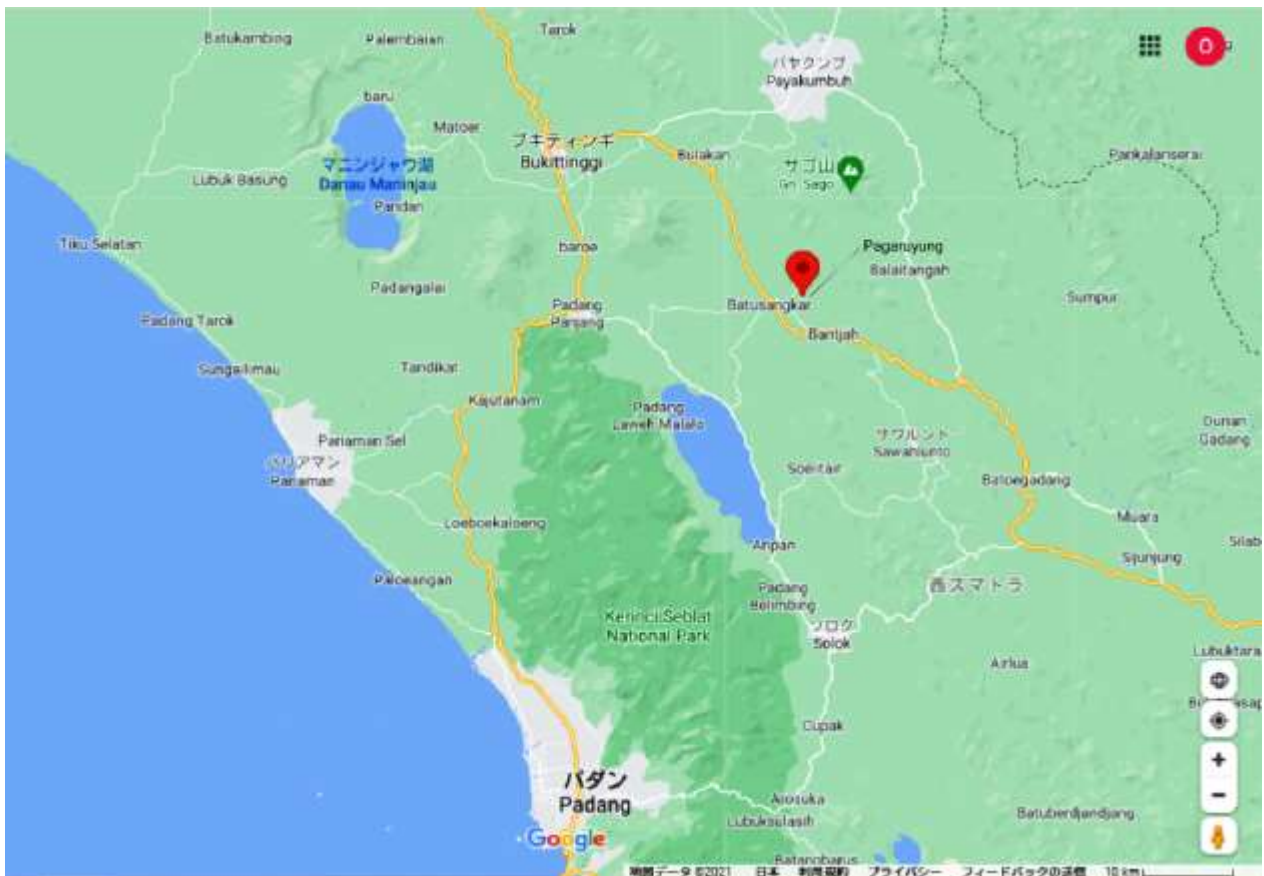


「8人のトラ(1)」(2021年04月09日)

かつてミンカバウ Minangkabau の地にパガルユン Pagaruyung 王国が栄えた。現在パガルユンという地名は村の名称として残っている。そこは西スマトラの州都パダン Padang の北北東に位置しており、直線距離なら60キロ足らずだが中間をクリンチセブラツ Kerinci Seblat 山系の北端が横切っているため、麓を大きく迂回しなければ行けない。現在のパガルユン村はタナダタル Tanah Datar 県タンジュンアメ Tanjung Ameh 郡パガルユン部落連合という行政地域名称にその名をとどめている。



部落連合と書いたのは村の語感と区別するためである。現代インドネシアにおける地域行政単位としてのそれは村と同格であるものの、現地語でナガリ nagari と称される制度はひとつの地域にある部落が連合して一個の地域行政単位を形成したのがその由来であり、村の語が持っているトップダウンのニュアンスはナガリに薄い。域内の部落が連合してひとつのナガリを形成するというボトムアップ意識はきわめて自治的であって、封建文化色の薄さを感じさ

せるものだ。ミナン人はたいてい、この話をすると喜ぶ。

更にそのナガリが連合してルハツ luhak になり、より大規模な自治領域が作られた。パガルユン王国が誕生する前は、ルハツやルハツに属さないナガリが連合して統治行政組織を作っていたと考えられており、王国形態への移行は元々形式的なものだったという見解も出されている。しかし王国に変化すれば、民の意識も変化して当然だろう。

ナガリという言葉はインド由来の印象がたいへんに強い。インドでナガリそのものが地名になっているほかに、nagar, nagara などの町や邦を意味する言葉から devanagari という文字の種類の名前にも使われていて、地域行政区画の名前としてミナンカバウで使われているこのナガリが古代ミナンカバウの地に南インドからの大規模な移民が行われた可能性を物語る傍証にもなっている。

高原の町バトウサンカル Batusangkar から旧街道を南東に向かえばパガルユン王国の壮大な宮殿イスタノバサパガルユン Istano Basa Pagaruyung が5キロほどの距離にある。

Istano は Istana、Basa は Besar がそれぞれ訛ってミナンカバウ語になったことを感じさせる。往来の穏やかな、緑濃く、明るく落ち着いたその旧街道に、その王国が持った豊かさをわたしは感じた。

パガルユン王国は領内で採れる黄金を大量に保有し、また米・コショウ・シナモンその他の物産を豊富に産して豊かに栄えた国であり、古い時代には黄金境のひとつと見なされていた。北スマトラのマンダイリン Mandailing やリアウのロカンフル Rokan Hulu などもパガルユン王国の支配下にあったようだ。

パガルユンとは元々パガルルユン pagar ruyung が語源で、ルユンという樹木のパガル(垣)の意味だったと言われている。パガルユン王国はムラユ王国のひとつとして興ったらしいが、建国説話ははっきりしたものがない。14世紀中葉に盛名を鳴り響かせたアディティアワルマン Adityawarman 王がパガルユンの王座に就いた時期があり、かれはまた諸ムラユ王国を従えたマラヤプーラ Malayapura 王国の大王にもなっている。

アディティアワルマンの没後、1409年にマジヤパヒツ王国の軍事侵攻があって、ソロツ Solok の東方にあるパダンシブスツ Padang Sibusuk で壮絶な戦闘が繰り広げられ、戦場は死体で満ち溢れた。その腐乱死体がその地名の由来になったという話だ。地元説話はジャワ

の軍勢をミンナカバウ人が打ち払ったと語っている。[続く]

「8人のトラ(2)」(2021年04月12日)

パガルユン王国のイスラム化は遅かった。スマトラ島北端に興ったイスラム国アチェがイスラム布教と政治支配の拡張を二本柱にした南下政策を推進し、軍隊とイスラム布教者が続々と南へ下って行ったこと、スマトラ島西岸のシンキル Singkil、バルス Barus、シボルガ Sibolga、ナタル Natal、ティク Tiku、パリアマン Pariaman などの主要な商港でインド洋を渡って来たイスラム商人や布教者たちが定住し、イスラム化がマイクロレベルの緩慢な進展を起こしたことなどが、スマトラ島北部地域での宗教面における主な様相だろう。



商港なら個々人の必要性に応じてイスラム商人が住み着くのは当たり前であり、外国人イスラム商人が地元の女を妻にしてその港における自分の家庭を築く姿は普通のものになっていた。ムスリムの家庭ができると、その家の妻と子供は必ずイスラム教徒になる。子供が成人し

て家庭を持てば、またそれが繰り返されて人間のネズミ算が起こる。

それとはまた別に、イスラム布教を目的にする外国人ムスリムも容易に港に住み着くことができた。階級差別を持つヒンドゥ文化へのアンチテーゼになる神の前の平等原理がヒンドゥ低

階層の者を引き付ける魅力作りに使われたことはよく言われている。布教者たちは十分に豊かなイスラムの学識を持っていて、イスラム神学を深めたい者にとっても、重要な教師になった。

このレベルはまだ個人レベルのイスラム化であり、社会の中でムスリムと非ムスリムが混在している段階である。イスラム教義の完ぺきな実践はイスラム社会の成立を前提にしており、社会全体がイスラムの原理で動くときにその構成員は全きムスリムとして生きることができる。そのイスラム原理で動く社会がウンマーと呼ばれるものであり、ムスリムと非ムスリムの混在社会が完全なるウンマーになるためには、社会統治者が自らイスラム化し、社会全体をウンマーにならしめるために被統治者全員をイスラム化に向かわせるように指導して行かなければならない。

ウンマーが、あるいはイスラム王国が、他の土地の社会をイスラム化するに際して常に力による闘争という暴力的流血的な方法に向かったのは、その原理のなせるわざだったのではないかとわたしには思われる。宗教とは個人の精神的思想的なものでしかなく、社会のあり方とは関係がないという観念はイスラムと無縁のものだ。ハラル・ハラムは個人が決意して実践するような問題でなく、社会が個人（つまりは家庭）にその方向へ向かわせるように圧力をかけ、社会がその実践を監視するという形ではじめて神の前の平等が実現するというのがイスラムの平等であり、このポイントはもっと地に着いた理解がなされるべきではないだろうか。



Tome Pires

パガルユン王国の民衆レベルには、14世紀終わりごろからイスラムの影響が浸透し始めたようだ。そしてパガルユン王家の中に、イスラムを奉じた王も出た。しかし、トメ・ピレスが1512年から15年までの間に書いた東方諸国記 Suma Oriental には、パガルユンでは15年間でムスリム王はひとりだけだったことが記されている。

ミンカバウでは16世紀を通してイスラム化が進展した。特にアチェのウラマがパガルユンの民衆と統治者にイスラム広宣を強く推進した結果、17世紀にはパガルユン王国のイスラム化が果たされて王国からスルタン国に変わった。だがいつからスルタン制が行われ始めたのかは明確にわからない。文献として最古のものはパダンのレヘントであるヤコブ・ピッツ Jacob Pits がパガルユンの王宮宛に

書いた1668年10月9日付けの手紙に記された「黄金豊かなミナンカバウの支配者スルタンアツマツシャ Sultan AhmadSyah」という賛辞だ。それ以後のパガルユン王宮は連綿とイスラム色が継続している。[続く]

「8人のトラ(3)」(2021年04月13日)

統治支配者のイスラム化によってミナンカバウの慣習はイスラム教義に即したものに換えられた。とは言っても、それまでライフスタイルの柱になっていた慣習とその基盤を成す価値観がまるで異なるものにそう簡単に入れ替えられるわけではない。

個人のイスラム化はその傾向を持つひとびとに容易に起こっただろうが、社会のイスラム化はその種とは毛色の異なるひとびとへの説得・懐柔・強制がなされなければ不可能なのである。従来から伝えられてきた慣習とその中を流れている生きる事に関連する価値観を入れ替えなければ、毛色の異なるひとびとのあり方を変えさせることはできない。それを強制的に行なわせようとするなら、流血を避けて通ることはできるまい。

結果的に建前と実態の二分化が起こり、「双方の良いところ取り」という姿に向かって行った。この傾向はヌサンタラのイスラム化において、いたるところで見受けられたものだ。

総本山のメッカにあるライフスタイルが真のイスラムであり、それに全面服従しないイスラムは似非イスラムだという見方をする人間はムスリムにも、おまけにどうしたことか非ムスリムにもいるのである。非ムスリムに批判されるイスラム教徒のあり方というのは、奇異なものではあるまいか。非ムスリムがイスラムの理想像を描くという図は、わたしには信じがたい気がする。それはともあれ、イスラムヌサンタラを標榜する現代インドネシアが直面している問題は、宗教論による批判でなくサウディ文化宗主国思想を持つ人間の存在のように見える。

ミナンカバウの慣習の大きい柱をなしている母系制は、その核部分から枝葉が派生して日常生活の細部にまで入り込んでいる。イスラムの観点からそれを見れば、許すべからざる社会制度になることは容易に想像がつく。だが社会に住んで生きている人間のほぼ半分は女性であり、母となるひとびとである。葛藤が起こらないはずがあるまい。

1803年、西スマトラのミナンカバウの地でイスラム純化運動が起こった。メッカから帰って来た三人のハジがメッカで強まったワハブ派の復古運動に影響されて、故郷ミナンカバウのイスラム生活のあり方が教義の本質から逸脱していることに改めて憤慨し、ミナン社会で行われている根本制度から諸行為の末端に至るまで、イスラム教義に全面服従した日常生活を社会の中に実現させることを決意して、意識改革の呼びかけをミナン社会に開始したのである。というのがパドリ運動あるいはパドリ戦争の序説に書かれている内容だが、実相はもっと深いものなのだという話もある。

スマルディアンタの解説によれば、その三人のハジは生命を引き換えにしてヌサンタラにイスラム勢力の基地を設ける任務をサウディ王アブドゥラ・イブン・サウツ Abdullah Ibn Saud から与えられたとなっている。

アラブを支配下に置いていたオスマントルコの軍勢を1802年にワハブ軍が破ってサウディアラビアの独立を成し遂げた。ワハブ軍がメッカを奪取したとき、トルコ軍の軍人になっていた三人のミナンカバウ人ハジ・ピオバン Haji Piobang 大佐、ハジ・スマニツ Haji Sumanik 少佐とハジ・ミスキン Haji Miskin は捕虜になって鞭打たれた。しかしサウディ王は三人の敵対者を死刑にせず、故国に帰ることを許した。三人に与えられた放免の条件が故郷にワハブ運動の支部を設けることだったのである。その支部を発展させてヌサンタラから異教徒オランダ人を追い払い、遙か東方にサウディの同盟国を作るのがサウディ王の目論見だったことは歴然だ。

サウディ王にとって自国の軍隊の近代化は急務であり、ハジ・ピオバン大佐を処刑しなかったのはそのための有用なコマのひとつと考えたからだ。ハジ・ピオバンはオスマントルコ軍のイエニチェリ軍団の将校であり、ムハンマツ・アリ・パシヤ Muhammad Ali Pasya が指揮する1798年のエジプトにおける対ナポレオン軍との戦闘で活躍した軍人だ。そのときの戦功を讃えて、ムハンマツ・アリはピオバンに名刀を授与している。[続く]

「8人のトラ(4)」(2021年04月14日)

三人のハジはミナンカバウに戻ると、イスラム純化運動¹を旗印に掲げた。この運動がパドリ運動 gerakan Padri と呼ばれ、その運動に加わったナガリヤルハツの宗教指導者たちとそれに追随する民衆はパドリ衆 kaum Padri と呼ばれた。

聖職者を意味するポルトガル語 padre をパドリの語源に求める説もあるが、イスラム純化運動を行うひとびとの精神構造には即していないような気がする。別の説によれば、アチェのペディール Pedir 王国(現在のピディ Pidie)でイスラムを学んだウラマたちがパドリと呼ばれたそうで、こちらの説の方が受け入れられやすいのは確かだろう。

その一方で三人のハジはワハブ運動推進の母体となる軍隊編成に取り掛かった。かれらはトアंक・ナン・レンチェ Tuanku Nan Renceh と知り合い、強い支持を得た。トアंकとはミナン語の敬称、nan は yang の同義語、renceh はインドネシア語の lincah で、この人物は多分戦闘の達人だったのがその名の由来のようだ。案の定、かれはパドリ軍の司令官になった。

三人のハジはワハブ運動を広げるために、編成した軍隊によるバタツ Batak 人の土地マングダイリンへの侵攻作戦を計画した。アラブのワハブ運動の支部をミナンカバウに設けることは、ハンバリ・ゼアロツツ Hambali Zealots のラディカリズム実践の先鋒になることであったという見解を、書物トアंक・ラオ Tuanku Rao を1964年に著わしたバタツ人マガラジャ・オンガン・パルリンドウガン Mangaradja Onggang Parlindungan は書いている。



三人のハジはハンバリの急進的理論を基盤に据えてミナンでのパドリ運動の様式を作り上

¹ 当時現地で信仰されていたのはシーア派でかなり堕落した宗派であったので、宗教の浄化運動を行った。

げた。その様式が世間を震撼させたのは、1804年にトアंक・レロ Tuanku Lelo が行ったスロアソ Suroaso でのパガルユン王宮親族の虐殺事件だった。

王宮親族がパドリ運動に賛同しなかったことを理由にして、トアंक・レロの部隊はそこにいた大王の親族全員の首をはねた。かれのその行為は司令官トアंक・ナン・レンチェの「できるかぎりの残虐さを見せつけて、世間を震え上がらせよ」という指図に従ったものだ、とトアंक・レロの子孫に当たるオンガン・パルリンドウガンは述べている。トアंक・ナン・レンチェのその言葉がテロリズムの本質論であることは今や語り尽くされたものになっているのではないか。

ハジ・ピオバン大佐がムハンマツ・アリ・パシャから拝受した名刀は、パドリ戦争における軍功を賞してこのトアंक・レロに与えられた。

パドリ運動指導者の中核、つまりは初期パドリ軍の主要指揮官を成したひとびとが8人おり、かれらはハリマウナンサラパン Harimau nan Salapan、つまり8人のトラと呼ばれた。ミナン語の salapan はインドネシア語の delapan だ。トアंक・ナン・レンチェ、トアंक・パサマン Tuanku Pasaman、トアंक・ラオ、トアंक・タンブサイ Tuanku Tambusai、トアंक・リントウ Tuanku Lintau、トアंक・マンシアガン Tuanku Mansiangan、トアंक・パンダイシケツ Tuanku Pandai Sikek、トアंक・バルムン Tuanku Barumun がその8人である。



Tuanku Nan Renceh (1762 - 1825)



Tuanku Tambusai (1784 -1882)



TUANKU IMAM BONJOL

Lahir: Pasaman, Sumbar, 1772
Wafat: Lotak, Manado, 08-11-1854

トアंकとは高貴なご主人様を意味する敬称であり、私のご主人様というプライベートな関係を示す意味で使われたのではない。ミナンカバウではこの言葉が元々、王や王族の男性に使われていたが、イスラム化のあとイスラムを極めた偉大な宗教者に対する敬称にも使われた。

トアングに似たトウング Tengku という言葉もある。トウングはムラユ文化の中の貴族の称号であり、貴族の子供は男女ともにトウングの敬称を使った。ただし、父親がトウングであれば子供は無条件でトウングを名乗ったものの、母親がトウングであっても父親がトウングでなければ、子供はトウングを名乗れなかった。

アチェではそれに似た Teungku が成人男性の敬称として使われた。貴族であるかどうかとは関係がない。アチェには “Aceh teungku, Meulayu abang, Cina toke, kaphe tuan” ということわざがあり、トウングはアチェ人男性であることを示す敬称として使われている。アチェでは、ムラユ人はアバン、華人はタウケ→トケ、ヨーロッパ人はトアンが敬称にされた。[続く]

「8人のトラ(5)」(2021年04月15日)

パガルユン王国の各ナガリの宗教指導者がパドリの旗下に続々と馳せ参じて社会改革戦線を形成する一方で、古来からの慣習を容認するイスラムを維持しようとするひとびとが急進的なパドリ衆と対立するようになった。この勢力はアダツ(慣習)衆 kaum adat と呼ばれ、民生を掌握する民事行政がその中核を成した。王国なのだから、国内統治行政の要所要所は王族に握られている。こうしてパドリ運動は現行政治制度に対する革命の様相を帯びて来たのである。

ついに1815年になって、トアングパサマン率いるパドリ軍がパガルユン王宮を焼き討ちし、王宮は灰燼に帰した。近代装備と訓練の行き届いたパドリ軍に対抗できるパガルユン王国軍ではなかったということだろう。

パガルユンの大王スルタン・アリフィン・ムニンシャ Sultan Arifin Muningsyah はインドラギリ Indragiri のルブツジャンビ Lubuk Jambi に逃げて、王都はパドリ衆の支配下に落ち、長期に渡って王権が空白状態になった。1818年にパガルユンを訪問したラフルズは、焼け落ちた王宮を見るばかりだったと書き残している。

パドリ戦争の矛先は北スマトラのバタツ人にも向けられた。バタツのイスラム化が三人のハジの目標のひとつを成していたのである。これは宗教純化運動とはまったく無関係の、ワハブ運動としてのイスラム拡張方針だ。

バタツ人に対するイスラム化の動きは長期に渡って行われて来た。古来からのバタツ人の伝統信仰はパルマリム Parmalim と呼ばれるものだ。北側のアチェ、西側のミナンカバウ、東側のムラユによるバタツ領土内隣接地域へのイスラム化の動きは絶えることがなかった。更にはバタツのイスラム化を危惧したオランダ人もキリスト教化を図るようになる。

インド洋に面した中部タパヌリ Tapanuli 地方の商港バルス Barus がバタツ人にとって最古のイスラム化の震源地だったようだ。マンダイリン Mandailing の商港ナタル Natal でもイスラム化が進行した。ナタルがミナンカバウ人にとってイスラム学習センターになっていたことは、トアング・リントウの経歴からもうかがい知ることができるだろう。

パドリ衆8人のトラのひとり、トアング・リントウはシナマル渓谷のリントウに住む富裕者で、イスラムを学ぶためにナタルに赴いた。更にそれを深めるためにパサマンに行って師についた。1813年ごろ、かれはリントウに戻り、タナダタルでイスラム純化の動きを開始する。

アガムのトアング・ナン・レンチェが行っているパドリ運動に感銘したかれは、即座にパドリ衆に加わった。最初かれはパガルユン王宮が自分の活動のパトロンになることを希望したが、そのうちに王宮のありさまを変えなければならないと思うようになり、大王の説得にかかった。ところが大王の動きはかれの期待に反するものだったのである。こうして最終的にパガルユン王宮への焼き討ち攻撃がかけられた。その攻撃を率いたのがトアング・リントウでなかったことは、その攻撃がかれの本意でなく、強硬派に押し切られたものだったことを想像させる。

パドリ運動以前のイスラム布教は、穏やかで家族的な方法で行われたと言われている。布教者は教義とその理を説き、個人の心に訴えることで理解させ、入信させた。王国統治者のイスラム化もその方法が採られたようだ。しかしそのやり方では、イスラムに近寄る気のない人間をムスリムにすることはできない。パドリ運動がそれ以前の布教方法と対照的だったのは、パドリが暴力を使う急進的なものであった点に明白に現れている。[続く]

「8人のトラ(6)」(2021年04月16日)

バルスやナタルから内陸部へのイスラム布教の動きは古くから起こっていた。タパヌリ南部地方でも、ミナンカバウ商人がやって来て商売を行った。住み着けば、地元の女を妻にする。そこでも、家庭レベルのイスラム化がバルスやナタルと同じように起こった。

アチェは北からイスラム布教を進めて、タナカロ Tanah Karo やパツパツ Pakpak にイスラムを浸透させ、東海岸部のムラユ人はシマルグン Simalungun にムスリムを増やした。

そんな状況の中でバタツ侵攻を計画していたパドリ衆中枢はひとつの奇貨に出会った。捨てられたバタツの王族である。その名をポンキナゴルゴラン Pongkinangolngolan と言う。ナゴルゴランとはバタツ語で「不明なものの到来を待ちわびる」という意味だそうだ。この男はバタツ王シシガマガラジャの王女ガナ・シナンベラと王の兄ギンドポラン・シナンベラの間に生まれた不義の子で、罪を背負った恥さらしという烙印を捺されて捨てられた。

アンコラ Angkola とシピロツ Sipirok で密かに成長したかれは、見つければバタツ王宮に抹殺されるだろうと考え、自分の運命から逃れるためにミナンカバウに向かった。ミナンに逃れたら、王宮からの刺客にいつ襲われるか分からない不安を抱える暮らしから解放されるにちがいないまい。

ミナンでかれはダトゥ・バンダハロ・ガンゴに仕えた。ダトゥの親友であるトアंक・ナン・レンチェがこのダトゥの使用人の境涯を知ったとき、かれは目をみはったのである。なんと、バタツ侵攻にうってつけの人物ではないか。

トアंक・ナン・レンチェはダトゥからこの使用人をもらい受け、ウマル・ビン・カタブの名を与えてムスリムにした。更にウマル・カタブをパドリ軍の将校にし、トアंक・ラオの称号で指揮官にしたのだ。

1816年、白の長衣に白いターバン姿のトアंक・ラオが率いるパドリ軍は騎兵5千人、歩兵6千人の大軍団でマンダイリンのムアラシポギ Muarasipongi になだれ込んだ。ルビス Lubis 一族が住んでいるムアラシポギでは、ほどなく要塞が陥落し、住民は一人残さず皆殺しにされた。

マンダイリンの各地区もひとつひとつとパドリ軍に蹂躪されて、すべての住民に対する殺りくの嵐が吹き荒れた。タパヌリの中部と南部の境界に位置するシピロッでは住民をイスラム化してパドリ軍の兵力を増強した。現在シピロッのパサルになっている場所で騎兵と歩兵の訓練が行われたとのことだ。増強された兵力は一千人を超えた。

パドリ軍はいよいよ、バタツ王国の中心部に進撃を開始する。ブキツバリサンとトバ湖溪谷に囲まれた天然の要害も、パドリ軍の進撃を阻むことはできなかった。パドリ軍が装備した多数の大砲と高性能銃はバタツ王国の軍隊をいとも容易に打ち破ったのである。

1819年、シンガマガラジャ王朝の首都バッカラ Bakkara の征服を果たしたポンキナゴルゴランはシンガマガラジャ十世の首をはねた。別の説では、王都での戦闘でバタツ軍を率いていた王が戦死したという話になっている。シンガマガラジャ十世は1785年生まれで、30歳で王位に就き、34歳で没した。トアंक・ラオすなわちポンキナゴルゴランは1790年生まれであり、ふたりの年齢はそれほど違ってない。

バタツ人の歴史にとってのパドリ戦争がそれだった。パドリ軍はバタツ社会に恐怖を広めるために血塗られた残虐さを存分にふるい、パドリ軍に殺されたバタツ人は10万人を超えたと言われている。バタツ社会にとっての地獄が出現し、バタツ史の暗黒の一ページとなった。オンガン・パルリンドウガンはそれをバタツ語で Tingki Ni Pidari と書いた。パドリの災厄がその意味だ。しかし歴史は、パドリの目的が達成されなかったことを物語っている。[続く]

「8人のトラ(7)」(2021年04月19日)

パドリ軍はバタツの地を征服した。だが、山野を埋め尽くした人間の死体が戦争の勝利者に復讐をはじめた。バタツの地をコレラ菌が覆ったのである。バタバタと死んで行く兵員に困惑したパドリ軍首脳はミナンに戻ることを提案した。結局パドリ軍はバタツ人を殺し尽くしただけで去って行ったことになる。トアंक・ラオはミナンに戻り、その後の対オランダ戦に従事して1833年1月に戦死した。

17世紀初めごろ、パダンをはじめとする西スマトラの海岸部はアチェの南下作戦によってその支配下に落ちていた。パガルユン王国にとっては領土を奪われた形になっていたのだ。

最初にパダンを訪れた西洋人は1649年のイギリス人だった。1663年にVOCがやってきて商館を開き、ミナンカバウ内陸部との通商を始めた。1668年にVOCは武力でアチェの駐留部隊を追い出して、パダン地区の支配権を手に入れた。アチェはパリアマン Pariaman を重視してパダンの防備を手薄にしていたため、VOCにとっては赤子の手をひねるようなものだったにちがいない。

パダンのレヘントになったヤコブ・ピッツはパガルユンの王宮に手紙を送り、最新状況とVOCの立場を説明して黄金の取引を要請した。パガルユン王国は大量の黄金を保有する豊かな国として知られていたのである。

VOCはパダンに港を開き、内陸部で産するコショウなどの物産や黄金を買い集めてバタヴィアに送った。パダンはオランダ人のコロニーになった。VOCはパダンから南に向かったの地域を独占し、かれらの商売敵になる者はそこでの取引を許さなかった。VOCの独占に反抗する商人が反乱を起こしたこともあったが、成功することはなかった。

パガルユン王国の内戦としてのパドリ戦争はオランダ植民地政庁にとって対岸の火事だったが、イスラム急進派の優勢が黙認できないものであったのは明らかだ。極端にイスラム化したプリブミ王国は取扱いが容易でないことを植民地政庁は知り抜いていた。オランダ側の利を得るために王国形態は残しながら人間を懐柔して操り人形に変え、原住民に示す顔はあくまでも王国にし、裏側で実利を得る方式を玉条にしていたオランダ人にとって、基本原理に西洋人への敵視を置くイスラム支配者は難儀な相手だったのである。



Tangkal Alam Bagagar

パドリ軍の攻勢にさらされたアダツ衆を統率するスルタン・タンカル・アラム・バガガル Tangkal Alam Bagagar は万策尽きて、ついにオランダ植民地政庁への支援要請を決意した。オランダ側が前から誘いをかけていた可能性は十分すぎるほど推測される。プリブミ支配者の内紛に乗じてその地の実権をかすめ取ってしまう手法はVOC時代から続けられていたのだから。

1821年2月21日、スルタン・タンカル・アラム・バガガルはパガルユン王国代表者としてオランダ植民地政庁との覚書にサインした。オランダ側は軍事支

援の対価として、王国の実権を受取る形にしていた。つまり、そのときにパガルユン王国が消滅したのだ。バガガルにそのような契約を行う権限は与えられていなかったと見る意見が当時から強く、後にタナダタルのレヘントに任じられたバガガルを売国奴と見なす見解が今でも語られている。[続く]

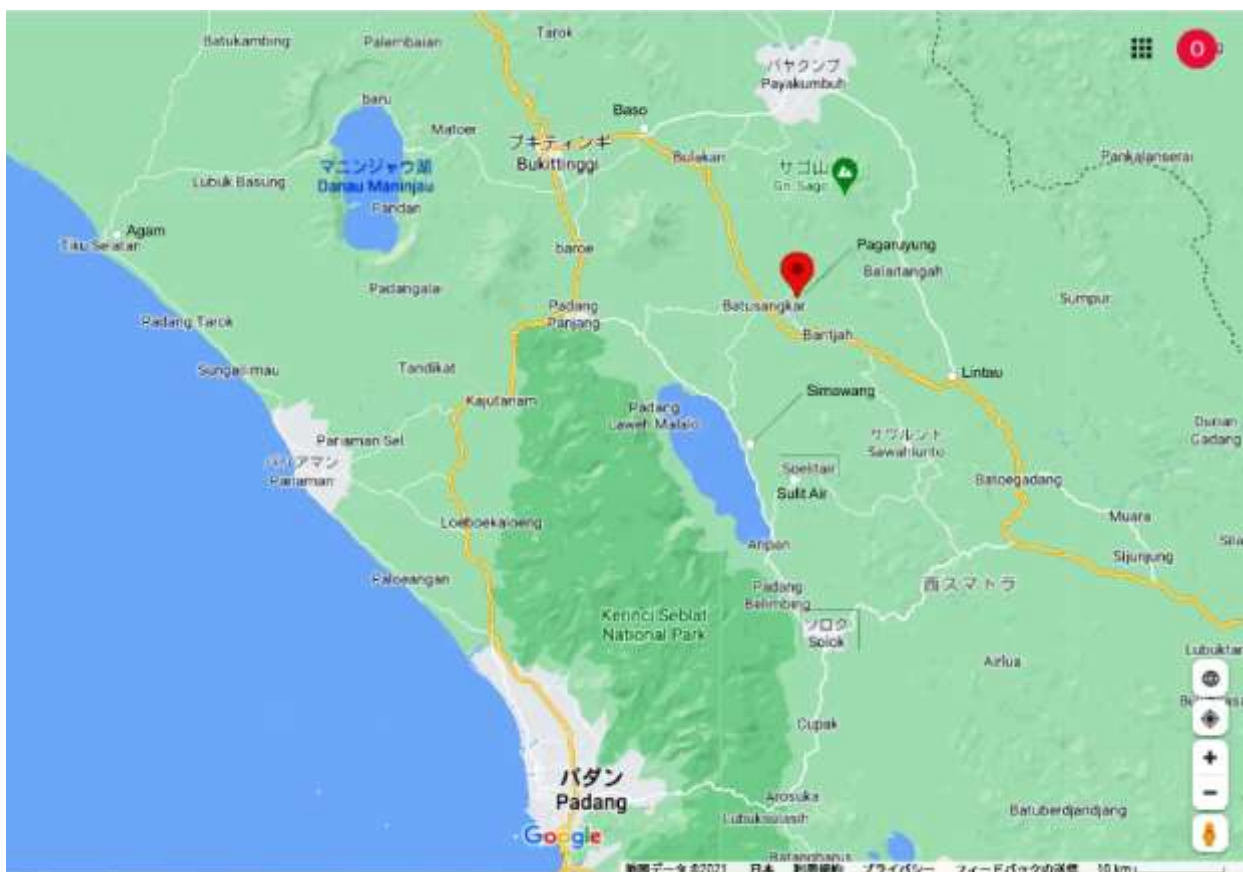
「8人のトラ(8)」(2021年04月20日)

1821年4月、パダン駐留オランダ植民地軍の出撃が開始された。攻撃目標地はタナダタルのシマワン Simawan とソロツ Solok のスリツアイル Sulit Air だった。その年12月には、パドリ軍への全面攻勢に出るべく、植民地軍部隊が続々とパダンに到着し始めた。

パドリ軍の制圧下にあったパガルユンの王都は1822年3月に植民地軍が奪還した。植民地軍はバトウサンカルにファン・デル・カペレン要塞 Fort Van der Capellen を築いて王都防衛の態勢を固め、一方のパドリ軍はリントウ Lintau に拠って対オランダ戦の戦力再編に当たった。

王都の保安が確保された後、オランダは逃走していた現役スルタンのアリフィン・ムニンシャ

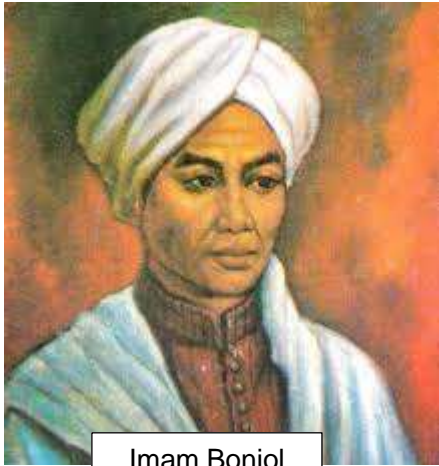
に王宮へ戻るよう要請し、1824年に実権のないスルタンがパガルユン王宮に戻った。かれはタナダタルのレヘントになった甥のスルタン・タンカル・アラム・バガガルに迎えられて王宮に入ったが、翌年8月に80歳の生涯を終えた。パガルユン王国最期の王が没したのである。



1822年6月、王都を確保した植民地軍部隊はアガム Agam に向けて進軍した。戦闘を続けて前進して行ったものの、8月14日にバソ Baso で行われた攻防戦で苦戦に陥り、指揮官の戦死も重なって、バトゥサンカルへの後退を余儀なくされた。パドリ軍はトアंक・ナン・レンチェ指揮下での戦闘で戦意を大きく高めた。

1823年4月、植民地軍は再びリントウ攻略に出撃したが、この時もパドリ軍の勢いが強く、植民地軍は敗退して要塞に戻っている。1824年9月、オランダ軍はアガムの一画を占領することに成功した。しかしそれ以後の戦況は一進一退を繰り返し、決着のつかない持久戦に入ってしまった。

パドリ軍の手ごわさに手を焼いた植民地政庁は休戦に方針を変えた。おりしも、ジャワでディポヌゴロの反乱が勃発し、軍事力をジャワに集中させなければならない状況に陥ったためだ。その頃、パドリ衆の指導者になっていたのはトアंक・イマム・ボンジョル Imam Bonjol だった。1825年11月15日に両者の間で和平協定が結ばれた。



Imam Bonjol

かつてパドリ軍の司令官を務めていたのはトアंक・ナン・レンチェで、かれがムハンマツ・シャハブをボンジョルのイマムに指名した。それ以後、ムハンマツ・シャハブはイマム・ボンジョルという名で呼ばれるようになる。トアंक・ナン・レンチェが戦死したあと、トアंक・イマム・ボンジョルがその後継者になった。イマム・ボンジョルは軍司令官ばかりか、パドリ衆全体の指導者に祭り上げられた。

イマム・ボンジョルはその休戦期間を利用してパドリ軍の戦力再編を行った。オランダ側の状況が良くなれば、またミナンカバウ征服にやってくるのが目に見えていたためだ。このまま両者共存に移行することなどありえない。オランダの野望はそんな程度のものではないのである。

そう書くと、オランダ植民地主義を一面的に悪の位置に据えるインドネシアの一般論調と同期することになる。インドネシア民族は平和愛好主義という主張をとやかく言うわけではないのだが、パドリ運動がワハブ運動だったことを忘れてはなるまい。戦備をやめれば逆十字軍は成り立たないだろう。

それと並行して、イマム・ボンジョルはアダツ衆に対し、反オランダ闘争に加わるよう呼び掛けを行った。問題は既に、宗教と慣習という二極対立から、オランダの参戦によって反植民地運動という政治的なものに性格を変えていたのだ。呼びかけの結果、アダツ衆にいた者がパドリ衆に加わって、パドリ軍の中に組み込まれる者も出た。パドリ衆の内部は厳格なイスラムの規律に支配されている。元アダツ衆はそれを受け入れなければ、対オランダ反植民地闘争に加われない。オランダが共通の敵になったとたん、アダツ衆もイスラム純化の方向に足を踏み出していたのは間違いあるまい。[続く]

「8人のトラ(9)」(2021年04月21日)

ジャワのディポヌゴロ戦争が終結して植民地軍が体力を回復すると、軍靴の足音がミナン

の地に戻って来た。パドリ戦争が最初のままのパドリ衆とアダツ衆の宗教生活純化運動に関する内戦でしかないのなら、この時点でそれはすでに解決済みになっている。ミンナの地はよりイスラムがかった生活を平和に営んでいる民衆の地になっていたのだから、パドリ戦争の関連でオランダ側に戦争を再開させる理由など存在しなかった。

元々、パドリ戦争という内戦にオランダが関わったのは、領土支配と物産独占が最初からの目的だったのであり、それは内戦が終わろうが終わるまいが、何の違ひもなかったのである。その政治と経済の方針を実現させるにあたってパドリ軍の存在が邪魔になるということだけがオランダ側にあった戦争再開の理由だ。

植民地軍は軍事行動を開始して、まず銃器と火薬の生産地であるパンダイシケツを攻撃して占領し、ブキッティンギ Bukittinggi にデ・コック要塞 Fort De Kock を建設した。まったく一方的な休戦協定の破棄である。

1831年8月にパドリ軍の根拠地のひとつリントウが陥落して、タナダタルは全域がオランダの支配下に落ちた。1832年7月、ミンナカバウ平定の決着を急いだバタヴィアは大兵力を投入してパドリ軍を一気に殲滅する方針に出た。アガムも植民地軍に制圧されて、年末にパドリ軍はボンジョルに追い詰められた。

1833年1月、植民地軍はパダンマンティンギ Padang Mantinggi で砦の構築にかかったところ、トアング・ラオ率いるパドリ軍に攻められて多くの死傷者を出し、後退した。1月29日のアイルバギス Air Bangis での戦闘でトアング・ラオは重傷を負い、植民地軍に捕まった。かれは船で運ばれる途中で死去し、遺体は海に投げ込まれたそうだ。

この1月には、タナダタルでアダツ衆が植民地軍に突然銃口を向けて襲い掛かる事件が起こった。オランダ側はレヘントのスルタンバガガルに嫌疑をかけ、逮捕してバタヴィアに流刑した。敵がパドリ軍だけでないことが明らかになったとき、植民地軍に動揺が走った。ボンジョルのパドリ軍を攻撃しようにも、いつ背中から撃たれるかわからない状況になったのだから。

1833年8月にはファン・デン・ボシュ総督がパダンに督励に赴き、ボンジョルへの力攻めを命令した。大部隊がボンジョルに向けて進軍を始めると、パドリ軍ゲリラ部隊が植民地軍を大いにかく乱し、大量の武器弾薬兵糧を奪うのに成功したため、植民地軍は結局大攻勢を諦め

た。ファン・デン・ボシュ総督はミナンカバウ平定に失敗したことを認めて次の総督に交代した。

1834年はあまり大規模戦闘の起こらない年だった。オランダ側はボンジョルのパドリ軍要塞総攻撃のために、大部隊の進軍と大型砲などを通すための道路と橋の建設にかかっていたのだ。その工事のために地元民が強制労働に駆り出されたとのことだ。

1835年4月、ボンジョル域内のあちこちのパドリ支配地区を制圧する戦闘が始まった。徐々に徐々に、ひとつまたひとつと、パドリ支配地区が植民地軍に奪われて行った。6月にはボンジョルの丘の上にあるパドリ要塞がほとんど丸裸にされ、植民地軍の大小さまざまな大砲が丘の上めがけて砲弾を打ち上げた。

2千人の増援部隊が到着したので、植民地軍は6月21日にパドリ要塞突入攻撃を敢行したものの、不成功に終わった。要塞は完全な植民地軍の包囲下にあったというのに、兵糧攻めは成功せず、それどころかボンジョル近辺のナガリからパドリ要塞支援の戦力や兵糧が要塞に届くようになる。

時にはパドリ軍が要塞から出撃して植民地軍の陣地を破壊し、また逃げ戻るといったようなことも繰り返された。12月には近隣のナガリ住民がパドリ要塞を包囲している植民地軍を後方や側面から攻撃することも起こった。[続く]

「8人のトラ(終)」(2021年04月22日)

1836年、ボンジョルのパドリ要塞攻城戦は一進一退を繰り返した。その12月3日、植民地軍は総力をあげての一大攻撃を開始する。そしてついに要塞の一角が崩れ、植民地軍部隊が中への侵入に成功した。しかしパドリ軍も全力をあげて応戦し、最終的に侵入した植民地軍部隊を追い払ったのである。

こうしてまた小規模な戦闘の繰り返しというにらみ合いに戻った。このボンジョル要塞攻城戦にオランダ側が注ぎ込んだ戦力はヨーロッパ人将校148人、プリブミ将校36人、ヨーロッパ人兵員1,103人、プリブミ兵員4,130人で、植民地軍プリブミ部隊はジャワ・マドゥラ・ブギス・

アンボンなどの種族から成っていた。

1837年7月にはさらに黒いオランダ人、ガーナやマリで雇われたアフリカ人兵士112人と下士官5人がオランダ人指揮官に率いられて到着している。そのような大軍団がパドリ要塞を包囲して少しずつ要塞の戦力を消耗させ、8月15日に総攻撃をかけてついに要塞を陥落させた。8月16日にはパドリ側の抵抗が完全に終息した。だがトアंक・イマム・ボンジョルは捕虜の中にも死者の中にもいなかった。かれは少数の従卒を伴ってマラパツ Marapak 地方に逃れたのである。

トアंक・イマム・ボンジョルは隠れ場所に逃れたあと、パドリ軍の戦力再編を試みた。だが、ボンジョルのパドリ要塞から逃亡できた者は数少なく、新たにパドリ軍に参加しようという人間も少なかった。かれを待っていたものは絶望だけだった。

1837年10月、トアंक・イマム・ボンジョルはオランダ植民地政庁に投降した。かれが投降の条件に出したのは、共に戦火の中を歩んで来た息子ナーリ・スタン・チャニアゴを植民地政庁の行政高官に採用させることだった。

1838年1月、政庁はイマム・ボンジョルをジャワのチアングルに流刑し、年末にアンボンに移した。そして1839年1月にアンボンから北スラウェシのミナハサに移し、そこがトアंक・イマム・ボンジョルの末期の地になった。かれは1864年に死去するまでの間、回想録を書いた。その中にはワハブ運動宗教者の残虐さに対する遺憾の意が記されている。

ところで、ボンジョルのパドリ要塞陥落がパドリ運動の終幕だったのではない。リアウ州ロカンフル Rokan Hulu のダルダル Dalu Dalu に作った要塞でトアंक・タンブサイの指揮下に行動していたパドリ軍が撃滅されて、やっとスマトラの大地からパドリ軍なるものが姿を消したのである。ダルダル要塞陥落は1838年12月28日だった。トアंक・タンブサイはマラヤ半島ネグリスンビランに逃亡した。植民地政庁はそれをもってパドリ運動の完結としたのである。

パドリ戦争が何であったのかという命題を眺めるとき、単純なものの見方は許されないだろう。オランダとの戦争を反植民地戦争という一辺倒の視点で見ると、互いに通商独占権を握ろうとして相手を蹴落とすために行った戦争という点を見落としてはならないと論じる西洋人歴史家もいる。

戦争が軍費なしに行われることなどありえないし、軍費を支出するのはもっと巨大な収入を得る目的がその裏側に付きまっているのが世界の常識であるのも忘れてならないことだ。オランダ側がパダンからその南部にかけての一带でパドリ衆を完全に閉め出したことが、パドリ衆がパダンの北側にあるマンダイリンやラオの黄金の産地を握りしめることを促した。パドリ衆もその地域での商売を独占し、商売敵が通商することは許さなかったのである。

パドリ衆が軍費を必要としていたことは明らかであり、パドリ軍が攻撃を行えばたくさん人間が捕まって奴隷にされた。軍事攻撃でなくとも、女を拉致誘拐することは日常茶飯事だったようだ。捕まえた人間は奴隷にして売り払った。だが、そればかりでなく、軍事行動の労役に使ったりもした。おまけに戦闘員予備軍にさえしたため、パドリ軍の兵員がまるで無尽蔵のように現れたのである。あれほど長期に渡った戦争でパドリ軍の兵力が長続きたのはその仕組みのおかげだったそうだ。[完]